

趣味の世界はその人柄を写す鏡

瀬川冬樹さん

レポーター 傅信幸

少年時代に作った
ラジオは100以上

PCMプロセッサとビデオカセット(VCR)をリスニングルームに持ち込むと、VCRのガチャガチャという操作感覚は家電のそれで、スイッチを押さ込む重さ、ボリュームを回すねばり気など、オーディオ機器がいかに注意深く作られているか改めて感心した。この話を某誌の編集者にしたら、「うわーっ、瀬川さんみたいなことをいう」

瀬川冬樹、昭和10年東京生まれ。44歳。オーディオ評論家であると同時にインダストリアル・デザイナーでもある。もっとも評論家業が多忙で、デザイン事務所は長らく開店休業の状態とか。

デザインの好き嫌いをうんぬんするのは、誰にも自由なことである。本来、デザインとは10人よりは50人、50人よりは100人と、より多くの人たちに支持されるのを良しとする。作者が満足していれば、さかさまに見られてもかまわない油絵とは違う、という話をどこかで読んだ。

オーディオ誌のテスト・レポートで、デザインについてのコメントをよく見かけるが、レポーターはその部分は読みとばす。好き嫌いはこちらが決めることで、写真、実物を見れば、自分なりにわかる。だからレポーターは書かない。

ところが、良しあしとなってくると話は別だ。デザインについて好き嫌いではなく、良しあしを書くにはそれなりの裏付けがライターに必要である。それを書くことの出来るごくごく少数のオーディオ評論家の一人が瀬川冬樹氏である。

この見事な名前はペンネーム。本名、大村一郎。古くからの友人は、「オームさん」と呼ぶ。大村にひっかけた“Ω。(オーム)が、かつてのイニシャルだったからだという。

デザインと、デンキの“Ω。とでは、奇妙な取り合わせと思われるかもしれないが、瀬川さんは技術雑誌の出身。《ラジオ技術》で編集者をしていたこともある。第一、そもそもが“ラジオ少年。であった。いまオーディオ界で活躍する同世代の人たちと同じように。

——ずいぶん作られましたか。

「100以上は」

《少年工作》という本に、少年向けのラジオ製作記事の連載が始まった。筆者はラジオ研究の草分けである斎藤健氏。実にやさしく書いてあった。コイルさえ巻けばラジオが出来る。見よう見まねで作ったら、「鳴っちゃった」

——《少年工作》読んでいたということは、元は“模型少年。?

「そう。10~11歳のころは鉄道模型ばかり作っていた」

——お父さんが、部品をどんどん買ってくれたんですか。ラジオなんかは100以上ということだし。

「いやいや、家は貧乏してたから」

ブリキカンから切り出した板で、トランスやモーターのコアを作るよう工夫した。モーターは一応出来たが、「トランスはだめだった」

父・松之助氏は、早稲田大学の英文科中退、東京美大(今の芸大)中退の、「中退人生」。大日本印刷でカラー製版の職人をしてきた「器用貧乏な洋画家くずれ」。ひどく薄給であったという。その父親の中退人生が影響を与えたのか、性格は、自称「無計画で気まぐれで、無鉄砲で気まま」。後に都立小石川工業高校で電気を、桑沢デザイン研究所でインダストリアル・デザインを学ぶが、どちらも中退。

父は画家志望の、母・フミさんは若山牧水の門下生の、「モダンじい、モダンばばあ」。お父さんは少年期に、お母さんはこの夏に亡くなられた。

——初めて聴いたレコードは何ですか。

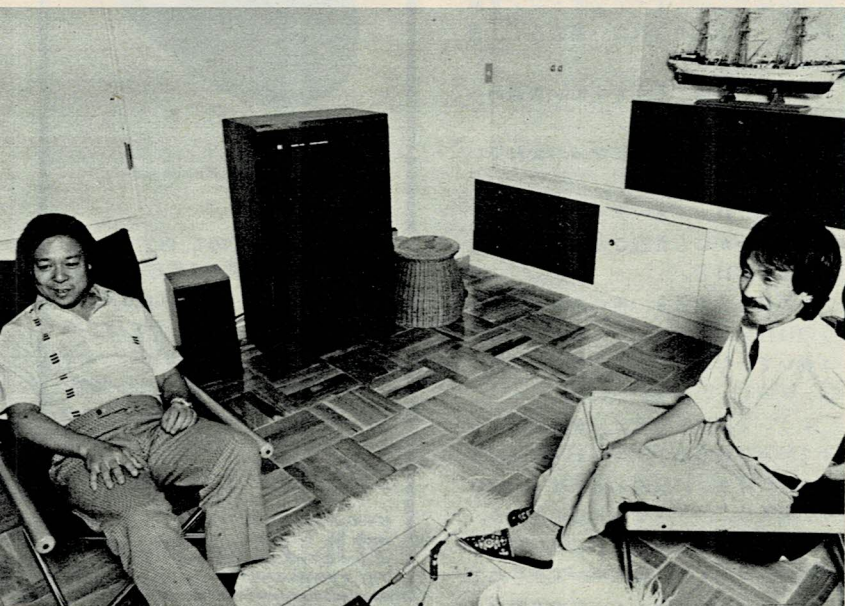
「覚えていない。ほんとに小さい時だったから。おふくろの実家(東京・木場)に電蓄があって、クラシックのレコードがたくさんあったから、遊びに連れて行かれちゃ、レコードを聴かされていたそうだけど。疎開先でも、引率の先生は、音楽と絵の先生でね、戦時中に、写生と和音の検聴ばかりやっていた。音楽と絵の条件は、ウソみたいにそろってた」

——そこから模型・ラジオ少年が誕生したのも、また変わった話ですね。

「疎開先の先生に高校生の息子がいて、これが大変な鉄道の模型きりがい。当然、本物の汽車にもえらく詳しい。写真よりすごい汽車の細密画まで書いたり。この人の影響かな」

大村少年は東京・神田の鉄道博物館に足しげく通う。「鉄道科学研究会なんぞに入ったり」

ラジオ少年が、この道に入ったのは、《ラジオ技術》への投稿から。同誌には



テーブルはEMTのプレーヤー用のインシュレーターに板ガラスをのせたもの 椅子は、チャールズ・イームズだコルビジエだ、ヤコブセンだと悩むのはいいが、買うに買えない 来客があれば床にベッタリと車座になっていたのを見るに見かねた友人が、折りたたみ式のをプレゼントしてくれた。

読者の実験・製作記事を発表する場があり(今でもある)、常連の筆者陣がコメントを寄せる。普通は1ページに2例だが、1人に1ページ、いわば今月の特選のスペースが、大村少年の投稿に与えられた。

その後、同編集部に籍をおいた時期も、製作記事のライターであり、編集者であった。後に本格的に学ぶことになるデザインの下地であるデッサン、イラストは、模型少年時代に身につけていたからカットも書いた。何でもやってしまう器用さが買われて「設計・製作・原稿書き・編集・カットと、全部やった」こともしばしば。忙しくて、学校に行く「ヒマがなくなった」。"Ω"のイニシャルはこの当時から。また、瀬川冬樹のペンネームも「特に考えることなく思いついた」

6畳のリスニング ルームは「実験室」

昭和40年代初め。この時代、ピンとこない人には、JBLがサンスイの手で正式に輸入されるようになったのが昭和40年ちょうど、マッキントッシュのパワーアンプ、MC-3500、2105が発表されたのが42年である。オーディオ・ブームの上昇カーブが頭をもたげてきたころ。〈ラジオ技術×無線と実験〉といった技術誌でも、単にアンプ、スピーカーの単体での実験・製作記事では終わらず、音の入り口から出口まで、トータルな見方の解説記事が見られるようになる。その筆者の好例が、瀬川冬樹。今なら、君のコンポを120%活用しよう、などといやらしいタイトルがつけられてしまいそうだが、「入門/ステレオ再生装置の総合設計」とか、「やさしい組み合わせステレオの実際」といった記事で、瀬川さんは解説を始める。こうした、オーディオをシステムマ



血液型=?. いろんな人が、あなたの性格からして□型だ△型だと決めつけてくるので、今度調べて、「誰が当たったのかを知るのが楽しみ」。オーダーメイドでなければ着れないほどのナデ肩。過労から、現在血圧は、「通常の人の1/2」。

タバコは大きい。「蚊取り線香を吸ったほうがまだまし」。酒は大好き。暴飲の記録はビール1ダース。「暴飲というほどじゃないな」。もっぱら夜行性。(瀬川一菅野の暴露合戦)——沖彦がほくをまねたのは、JBLの537-500、緑色のかさのスタンド、ぬいぐるみ、ライカ、ハッセル……。

ックにとらえる記事にペンがさえた。

昭和41年のラジオ技術誌の臨時増刊「これからのステレオ」のグラビアで、JBL大型3ウェイを一方に、アンプ棚はマランツ7、クオード22-II、フィッシャーなどの「著名品。のほか、ごろごろと10台以上。プレイヤーはアーム3本、2本つきで2台、カートリッジは所狭しと並び、これら一式、セットされた部屋は6畳間なのだ。うわーっ、木村無線みたいところに住んでいる人がいる、というのがかつてのレポーターの印象。このグラビアにはほかに、巨大な低音ホーンもつ5ウェイの前でどうだというような顔をしたり、立派なキャビネットに一式まとめた外国人とか、「すっかり出来上がってしまった」すごい人たちもまた紹介されていた。しかし、6畳間のもよは「実験室。の趣があり、あれやこれや取っかえ引っかえの、いかにもコンポーネント・マニアの部屋。もっともコンポーネントという呼び方も、後になって使われるようになったのだが。

これが実は、当時の瀬川さんのリスニングルーム。振り返れば、このごちゃごちゃ加減が、音の入り口から出口までのカンドころを教えてくれる記事の、当然の下地だったのだろう。「すばらしいアマチュア時代を体験してこそ、本当のプロになれる」とは、菅野沖彦さんの名言だが、瀬川さんの部屋は、いかにもマニ

アの行き着く先。また、「ソフトの瀬川」と評したのは岡俊雄さんだ。

「昔から何でもないアンプやスピーカーを持ってきても、彼がセッティングや調整を始めると、フツッとい音が出るようになる。そういう面ではたけていたね」とは、当時からの知人の証言。

オーディオは 「趣味の世界」

オーディオの一般誌は次第に厚味を増し、新しく創刊される本も出てくる。音楽誌にオーディオの記事が載り始めた。〈ステレオサウンド〉の№22(昭和47年4月)から「良い音とは、良いスピーカーとは?」という連載が始まり、良い音とは何か、原音再生とは何かという、堂々めぐりをしそうな、それまで技術雑誌がわざとしくく特集を組んだきらいのあるテーマに、瀬川さんがあえて挑戦した。

まず、エジソンの円筒蓄音機がドイツで初公開されたときのもよを伝える新聞記事の引用で始まり、原音再生の歴史、この言葉の原点から、写真であるべきだと論、が展開してゆき、やがて筆者自身はナローレンジの音を受け付けず、という話に進む。○○Hzといったような数字が多く、f特図や構造図なども出てくる。技術雑誌のなごりのような面もあるが、一方で氏のペンが表したのは、「趣味の世界」のとらえ方としてのオーディオ。

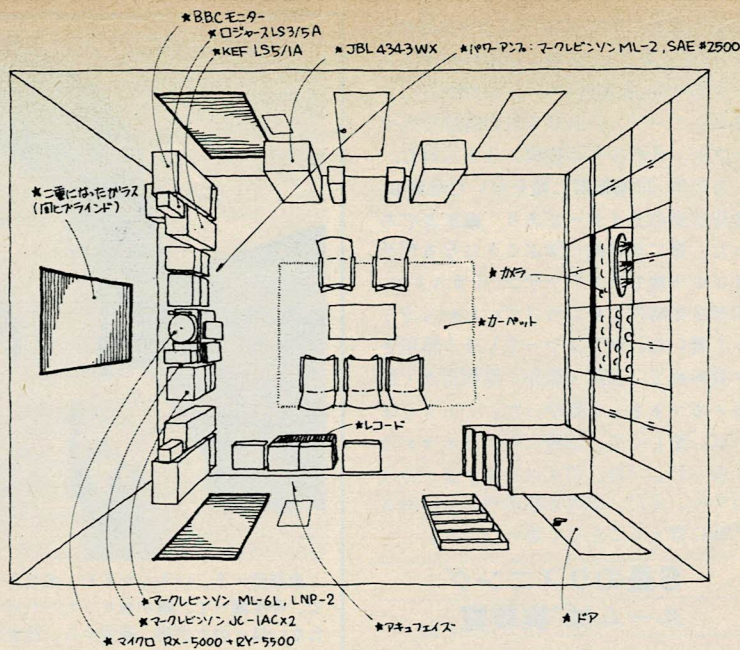
音楽・音・メカニズムの三者の関係を、食べ物が出てきたり、カメラに例えたり、「エンクロージャーに取り付けて、鳴らしてみるとひどい音が出る。取り出して手にとり、赤く塗られたマグネットのこの美しい型のユニットが悪い音を出すはずがないと首をかしげた」といったような物マニアックな面が出てきたり。こうした書き方はほかにもないのだが、瀬川さんの独壇場。単なるファンにとどまらず、多くの信奉者を得る。

「およそ趣味、道楽のすべてには、必ず人物が映し出される。ステレオ装置もまた例外ではない。あなたのステレオ装置、レコード・コレクション、そしてあなたの部屋で鳴る音、すべてがあなたを映し出す鏡だ。およそ趣味の世界ほど、人を無心の状態に没入させるものはないだろう。そういうときの人間に虚飾は通じない。趣味の世界にこそ、最もよく人柄が表れるといわれるゆえんである」(ステレオ臨増・あなたのステレオ設計、虚構世界の狩人、46年7月)

単なる紹介や解説記事ではなく、「読み物」として読者を魅了するペンは、第一人者であろう。そのころ岩崎千明さんはツツパリで読者を引きずり込んでいた。

音まみれの毎日を送るオーディオ評論家として、その表現の場の大半は「誌面」である。ちょうど小説家が無名時代、列車の窓からかい間見た風景を、あるいは3つの題材で1本執筆するといったような、文字で表す訓練を積むのと同じように、耳にした音をいかに文字に載せるかというところに腐心する。

瀬川さんの場合「読み物」から受けるこの人の表しかたの印象と、試聴記事の



それとはニュアンスが違う。

音の表し方には大別して4つある。歪み、f特、分解能、中域、低音など、特性をスパッと表すような用語がまずオー。次いで、立ち上がり、解像力、量感、キレ込み、響き、伸び、など「オーディオ用語」での表現。そして、しなやか、柔らか、繊細な、ただよう、ふき抜ける、地をはう、といった表現に、ハーモニー、オーバートーン、クレッシェンドで、などと音楽の言葉が混じってきて、最後は、ボーカルがいい、クラシック向き、ベースがこう聴こえた、ピアノがこう鳴ったという、全く音楽にゲタを預けてしまうタイプ。

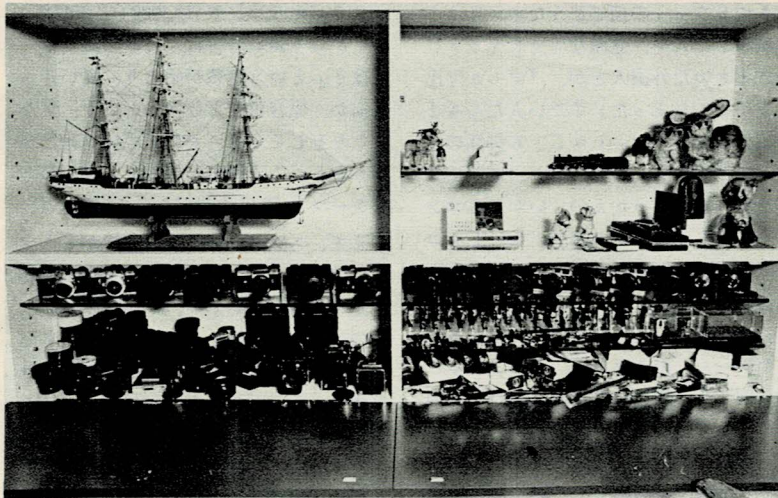
この4つのどれを使うか、あるいは4

つをどう組み合わせるかは、評論家によって志向の異なるところだが、瀬川さんは中の2つを合わせる。「もっと音楽寄りの表現も使おうかと、このごろ迷っている」のだけれど、中の2つの表現を「瀬川流」に表す。

文字の上での音の表現は、ライターと波長の合わない読者にとっては外国語のようなものだが、わかってしまうと、わかる。実際に聴いてみなくても、聴いた気になるぐらいの説得力を持つ。

データ的な用語と、楽器・音楽を表す言葉の中間をゆくのは、瀬川さんがラジオ少年から技術雑誌畑を歩み、一方で趣味の世界を語る良きパーソナリティーであるという、頭と心の中間に位置する人であるからだと思う。と同時に、ただ中間に立つだけではなく、折あれば心の側へと、チラッチラッと傾く。傾きながら自問すると、中間へ戻ってしまうことが多くて、ああ趣味にとどめておけばよかった、プロになるんじゃないかと、振り返っているのではないだろうか、この人は。しかし、その葛藤がまた、氏の信奉者にとっては、たまらない魅力でもあるはず。

それでも、オーディオのシンポジウムで、氏お気に入りのシステムを、わが家で鳴っている音に実際に近づけたところ、「永年あなたが書いていたことが、きょう始めて実感がもてましたよ」と言われたことが2度あるのがショック、とは氏の独白。



オーディオ好きにカメラ好きは多い その代表格が瀬川氏 とある理由からコンタックスは持たない ライカフレックスのコレクションでは、カメラ界でも高名 ライカ熱はドイツの工場まで行かせたほどだ

精密な帆船の模型が、この人らしい。——自分で作ったんですか 「まさか」

憧れのブランデー・グラス を捨て切れない

欧州には1等賞金が3億とか5億円とかいう超高級の宝クジがあるそうで、もしそんなのが瀬川さんに当たりでもしたら、これは絶望的なことになるなあ、とつぶね思っていた。

もう15年前近くになる話、銀座のある店で「ブランデー・グラスについてはひとつの理想があって、それはしかし空想の中のものではなく、実際に手にしながら逃してしまった体験がある。(中略)何げなく手にとった大ぶりのブランデー・グラス。(中略)乱暴に扱ったら粉々に砕けてしまいそうにもろい薄手のグラスでありながら、怖ろしいほど軽くやわらかく、しかも豊かに官能的な肌ざわりだった。あんなすばらしいグラスはめったにないものであることを、今にして思い知るのだが、それよりも当時、1個6,000円のグラスはわたくしには買えなかった。ああいう澄ました店で1個だけ売ってくれとは、今なら言えるが、懐中が乏しい時にはかえって言い出せないものである。今でもあの感触はまるで手の平に張りついたように記憶に残っている」(ステレオサウンド、No.26、73年春号)「住居という条件は容易には変えられない。6畳という狭いスペースの中で、何がどこまで可能かという1つの限界を、この耳で確かめてみたいというのが、こういうシステムを持ち込んだ動機である」(ラジオ技術臨時増刊、昭和41年12月15日発行)「いい年齢をしていまだに自分の家

を持つことができず、古い木造の借屋住まいで、リスニングルームには壊れかけた本木造がいちばんいい、などとうそぶいている」(前出・ステレオサウンド)。

氏の信奉者は、年齢層が広く、音楽のジャンルを問わない。瀬川冬樹は、物にこだわりながら何を使うかではなく、どう使うかが問題なのだ、という、一種フツ切れたところがある。そこで、知恵が出てくる。「ソフトの瀬川、と例えられるゆえんでもあろう。それでも、やはり完全には物を捨て切れなくて、それは夢として広がってゆくので、ブランデー・グラスが手に入らないのなら湯呑み茶碗だって仕方がないじゃないか、それがいやなら、ブランデーは飲まない、あるいは安ウイスキーでまんすするという発想はそもそもこの人にはない。今は手に入らない、がしかし、そこへの「あこがれ、をやはり捨て切れない、それを切々と語るのが、この人の「波長、なのである。

*

〔後記〕

2回にわたり長岡鉄男、上杉佳郎、菅野冲彦、瀬川冬樹各氏について書いてきた。僕は4氏の読者である。現在、4氏のすむ世界の末席をけがす身になりながら、まだ読者であることに違いない。これまで誌面を通して、4氏の個性は相当に違っているとは、読者諸兄が思っているつもりだった。ところが、いざ出かけてゆくと、これがもう、すさまじいばかりの違であることを実感。今、4人の

顔写真を並べて、人の顔には違いないが、これは油絵の具のチューブを4つ並べたのに等しいのではないかと感じている。

音が違うのはもちろんのこと。長岡さんは前号に書いたとおりだが、上杉さんは温かく深い音に一瞬のきらめきがあった。菅野さんは豊かな響きの中に楽器たちが息づいて、そして瀬川さんは、エキセントリックになるかならないかの寸前のバランスでアリティーを再現していた。

と書くと、各氏のファンは、やっぱりうだったかと共鳴してくれるはず。ところが、実は長岡さんの部屋以外は、取材時にはチョイ聴き、あるいは何も聴いていないのだ。ぼくのイメージを表しただけ。拙稿でやったことは、これまでに活字で知ったことに、経歴や逸話を書き加えた程度。「人、を語るにはスペースがないし、第一こちらが半人前。

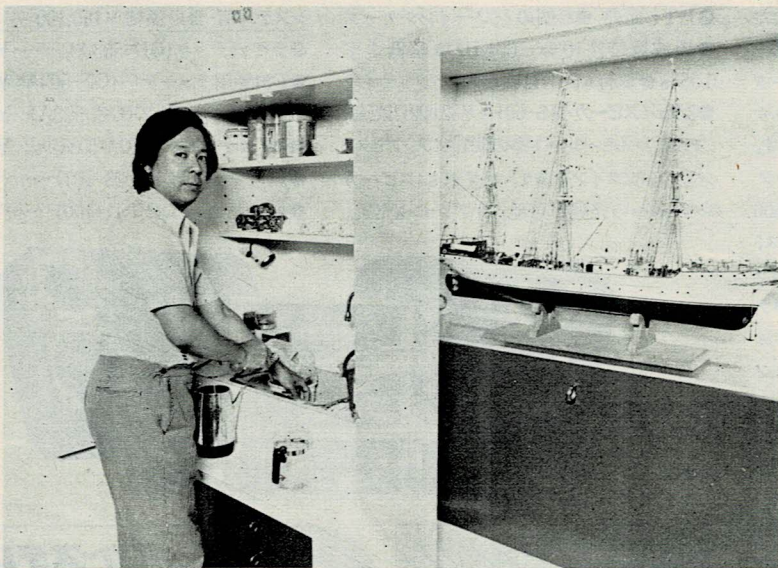
評論家という肩書きは、当人よりも、つける方にとって便利。解説者、紹介者、さらには愛好者、研究者、便利屋なんぞをひっくるめて、ひとたび批評っぽいペンでもとれば、評論家となる。かくして、ザッと数えて50人、少なく見ても30人のオーディオ評論家がいる。そのなかから4氏を訪問したのは、4氏がFMfan(別冊も)のライターであるということと、「本当に、評論家であるということからである。だからといって、他の人は「違う、という意味ではもちろんない。4人という制約もあった。前号を見て、思わず吹き出してしまった。このグラビアに「安定性、将来性で人気最高/公務員になろう」なんて広告があったからだ。悪意もなければ冗談でもなく、偶然だったのだから、それにしても4氏がフリーで原稿に追われ、悩み、音を書くことに身を削って生きているところに、「安定性、将来性……」とはこれいかに。読者の皆さん、オーディオ評論家なんぞになろうなんて思っはけませんぞ。

その半面、人の魅力は大きい。大きな違いこそあれ、4氏は、オーディオが人間のかっこうをして歩いているに違いなかった。それぞれに生きているが、ネライはひとつ。なのにこれだけ違う。さて貴方は、どこへ波長を合わせるか。50人から30人へ、さらにこの4人のうちでも、今やオーディオ誌は、読み分けないと、きりのない時代になっているのです。

〔前号の記事中、誤りがありました。おわびして訂正します〕

中学4年生の時に肺病を患い、2年間の療養生活→戦後、持病のぜんそくが悪化して3年間ブラブラしていた。(長岡鉄男さんの項)

(イラスト・長沢英夫)



「シャッキンコンクリート」のリスニングルームでは独身を宣言 家族は、この部屋に入れない。来客にいったコーヒーのカップは、自分で洗う。そのため部屋の一角に流しを設けた。独身をとなえるのは、家族に引っ張られると老けてしまう気がするから。いつも見るものすべてが「ワーツ、すごい」と感じる子供のような気持ちでいたい